

■ 平成26年度研究発表会を開催しました



本年度の研究発表会を下記の日程で開催しました。

日時：平成27年2月28日（土）

13:30～16:00

場所：白鷹町中央公民館（白鷹町荒砥甲）

内容：

- 1 絵はがきで見る「大正・昭和の白鷹」
佐藤健一
- 2 五十公野城の落城と逃走
江口儀雄
- 3 深山観音堂境内発掘調査報告
平吹利数

研修室がいっぱいになるほどたくさんの方々においでいただきました。

発表会の後は懇親会を行いました。懇親会にも



多くの方に参加していただき、賑やかに過ごすこ

とができました。

■ 高橋利三郎について

『史談』27号に会員佐藤與七さんの翻刻した高橋利三郎の「随想記」を掲載しました（p51-66）。けれども編集の不手際で、筆者の高橋利三郎については説明不足となってしまう、そのひとりとなりを読者には伝わらない状態だったと感じます。

高橋利三郎は明治21年に、旧蚕桑村高玉生まれ。米沢の興譲館中学を明治41年に卒業、仙台の第二高等学校から東京帝国大学に進みました。

卒業後には旧逓信省に入り、新潟、広島などに勤務した人である。大正13年にストックホルムであった万国郵便連合会議に出席した時の記念の額が昨年、「あゆむ」で開催された「白鷹町 我が家のお宝展」に出品されました。それだけでなく、様々な文書が見つかりましたので、その一部を佐藤與七さんが翻刻して下さったという事なのです。

高橋利三郎の詳細は、この後に三男で白鷹町在住の高橋誠三さんと丸川二男会長が書いて下さっています。

以上を『史談』27号の佐藤與七さんの仕事の補足として記しておきます。（守谷英一）

■ 父の足跡を残す記念品

高橋誠三

わが家の座敷に、一枚の大きな記念写真が飾られています。写真の上には、「万国郵便連合第8回会議-1924 スtockホルム」と書かれています。

父、高橋利三郎は大正13年（1924）、北欧スエーデンの首都ストックホルムで開催された万国郵便連合会議に日本代表団の一員として出席しました。

父は明治21年、白鷹町高玉に生まれ、米沢興譲館中学、仙台の第二高等学校、それから東京帝国大学に進みました。長男だったのですが、家のことは次男に任せて、大学卒業後は逓信省に入り、朝鮮の京城（現在の韓国ソウル）にあった朝鮮総督府に赴任、私はそこで生まれました。

朝鮮総督府逓信局在任中、父はストックホルムに行く機会を得たようです。どのような経路でヨーロッパまで行ったかは分かりませんが、当時、日本からは3～4週間はかかったらと思う。あちこちを外遊しながら現地までたどり着いたと生前に話していました。

この記念写真には、世界の代表団の一人一人の顔写真が掲載されているほか、スウェーデン王室や首相などの政府要人らしき人物、また会議場の建物も写っています。会議出席者はスウェーデン国王より勲章、また記章が与えられました。父はこの会議でさぞ、各国の代表団と交遊を深めたに違いありません。

元来体が弱く、京城から東京の本省に戻り、局長在任中に病気となり 41 歳で退官、実家のある白鷹に帰郷、その 2 年後に満 43 歳 5 ヶ月で亡くなりました。ストックホルムでの会議から 8 年後のことでした。

病気は胃潰瘍で、現在であれば何の苦もなく手術でき、もう少しは生きて仕事ができただったと思います。記念写真、勲章、記章は父の足跡を偲ばせてくれます。万国郵便連合会議は現在も 5 年毎に行われており、先年は東京でも開催されたようです。

(たかはし せいぞう 農業、白鷹町在住)

■ 高橋利三郎覚書・1

丸川二男

一年ほど前の話になるが、故・高橋利三郎の家から本人が渡欧時、妻あてに出した書簡とメモの入ったダンボールの箱が見つかった。手紙の数は七十二通ほど、その他に絵はがき、洋行時の日記の一部、随筆、創作の寓話というようなメモ類や新聞のスクラップ帖などが、この利三郎という人のことは現在もほとんど知られておらず、埋もれたままの人である。

高橋利三郎は明治二十一年生まれ。旧蚕桑村高玉生まれ。米沢中学校（現米沢興譲館高等学校）を明治四十一年に卒業、仙台の第二高等学校から東京帝国大学に進んだ。卒業後に旧通信省に入り、新潟、広島などに勤務、エリートコースを歩んでいる。



米沢中学校卒業時（中央）、明治 41 年

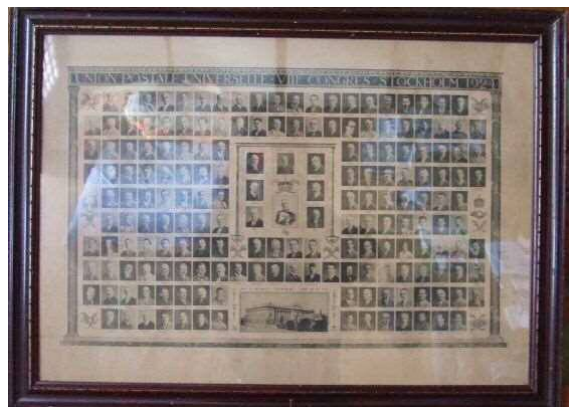
京城（現ソウル）勤務の大正十三年（1924）、利三郎は選ばれてストックホルムであった万国



京城（ソウル）勤務の頃の利三郎

郵便連合会議に出席するために洋行している。三月末に出国、往路はインド洋航路だが、帰りはアメリカ・ハワイを廻って十二月二十日ごろ帰国した。

下の写真はスウェーデン国王を中心に、会議に出席した各国の代表団を配した記念の額であり、利三郎は中ほどの右端に写っている。



このほかに利三郎の洋行の写真は三枚ある。エジプトのピラミッドを背景に撮ったもの、行きと帰りの船上で撮ったものがそれぞれ一枚ずつである。当時は写真がまだ貴重な時代で、記念写真を分けてもらったものだろう。

その写真を下記に掲載したが、一番上がピラミッドを背景にしたもの、中が往きの船上写真で日本郵船の「榛名丸」船上（前列の右から二人目）、一番下が帰りの東海汽船の「コリア丸」（三列目の左から四人目）で、太平洋を航海中に撮影したものだった。

残っている手紙の束の中には、乗船名簿の一部があり、その肩書きなどを見ると医師、大学教授、仏大使夫人、子爵、学生、工兵大尉、官僚、貿易商など、多才な顔ぶれである。ここに名前が出てくる人たちはすで亡くなっているだろうが、子供や孫は健在でいるだろうから、こ

れを明らかにすればまた別の方面から利三郎のことがわかるかもしれない。



エジプトのピラミッドを背景にした写真



日本郵船「榛名丸」で（利三郎は前列の右から二人目）



東海汽船「コリア丸」で（利三郎は三列目の左から四人目）

船内の食事のメニューがそのまま手紙として使われているものもある。ピラミッドの周辺のメモもあるが、さして感動したふうでもない。

ロンドン、パリを廻ってストックホルムの会議に出席した後、利三郎はヨーロッパ見物しながらアルプス越えてイタリアのミラノに出る。

そこであらかじめ連絡していた同郷の興譲館の後輩である小林孝助に会っている。

小林は西横田尻の出身で、先に蚕糸関係の会社からイタリアに行っていたが、派遣された会社の業績が振るわず、勉学の意欲も萎えていたらしい。日本を離れてから七年余り、頼る人もいないミラノで小林の身に何があったかは知るすべもない。利三郎のメモによれば、小林の様子を見かねたか、帰国をすすめると同時に、手持ちの金の中からいくばくのを分け与え、自分はアメリカまわりの帰路に着いたのである。このあたりのことは稿を改めることにして、先にすすめる。

その後、小林孝助は日本へ大理石の輸出する会社に見出され、良質な大理石を日本に送りこむ仕事につき、現地の女性と結婚して生活も落ち着きを取り戻したという。またその間にオペラ歌手の藤原義江や佐藤千夜子など、早くにイタリアへ渡った日本人を面倒みたことでも知られている。

一方、利三郎は帰国後も旧逓信省に勤めたが、昭和五年に病気のために退職して帰郷する。その後は地元の学校に出向いて話をしたり、私塾のようなものを開設して若い人たちの教育にも取り組んだが、昭和七年五月、胃潰瘍がもとで四十三歳という若さで死去した。後に従四位勲五等を受けている。

さらにその後、押入れの中から出てきた利三郎の古いスクラップ帳や絵はがきを見せてもらった。新聞は昭和四、五、六年のかなり大雑把な切抜きで、山形新聞、東京日日新聞、朝日新聞などが主だった。ただ、その記事の内容は多くが当時の農村が炭や養蚕の安値で立ち行かず、疲弊していく状況、工女の労働実態、浜口内閣の金解禁の記事、県内の小作争議、中央、地方選挙の様子、さらには無産階級の運動の記事などで、利三郎本人が政治や経済はもちろん、当時の社会状況などに相当の関心を持っていた様子がうかがわれる。むろん未整理のままである。

追記 この二月に発行した『史談』27号に掲載した高橋利三郎について、あちこちから問い合わせがあった。掲載にあたり資料の所有者である高橋誠三氏の理解と協力を得たことに謝意を表したい。

■ 塩田の行屋について

守谷英一

東北芸術工科大学の文化財修復センターで、塩田の行屋にある御沢仏の修復がなされている（修復がすんで3月末には、岡田靖先生が中心

になって修復してくださっているのだが、その価値については「会報 史談」第 25 号 (2012. 8. 25) と第 29 号 (2013. 5. 2) に会員の宮本晶朗さんが詳しく書いてくださっているが、それが納められている塩田の行屋について書かれることはそれほど多くない。教育委員会が発行している『白鷹町の文化財』の 2011 年版を見てみたが、詳しい記述はなされていない。『白鷹町史』にも見つからない。『十王郷土史』を見てみると、2 ページほどの記述が見つかった。それによると、明治 10 (1877) 年代に信仰者の浄財を基にして建築され、昭和 5 (1930) 年まで 4 代の行者がいて、近隣だけでなく、遠く新潟県の長岡市、三条市附近からは物品や金銭の寄附が最も大きかったようである。

4 代の行者は下記の通りである。

| | | | |
|----|-------|--------|---------|
| 初代 | 明寿海上人 | 小滝 | 明治四十一年没 |
| 二代 | 仏心海上人 | 東田川郡栄村 | 明治二十九年没 |
| 三代 | 明善海上人 | 初代の弟 | 大正三年没 |
| 四代 | 智妙海上人 | 折居 | 昭和十七年没 |

引用は (十王郷土史編纂委員会, (1961). 『十王郷土史』: 216 十王郷土史刊行委員会)

これらの行者は湯殿山行者であるということであるが、どのような活動をしていたのか、また、なぜ長岡市や三条市付近に多くの信者がいたのかはよくわからない。

行屋は、昭和 5 年以降は無住となり、現在は近所の方々が管理をしているが、年月とともに建物の傷みも進んでいる。

東北芸術工科大学大学院で、修士課程の 2 年間にわたり塩田の行屋の調査や仏像群の保存、保護に関わっていた山内れいさんの修士論文は、御沢仏から採集したカビが接着剤の膠 (にかわ) の劣化に与える影響について研究したものである。それを読ませていただいたが、行屋の環境は仏像群にとっては厳しい環境であることがよくわかった。

また、山内さんと話す機会があり、研究の動機を聞くことができた。山内さんはこのような厳しい環境下での保存を研究しようとしたかということについて、次のように語ってくれた。このような地方文化財の保護だけを考えると、きちんと管理できる施設に保存すればよいというのが一般的な考えだが、その文化財が地域から離れて管理されるのは美術品としては生き続けるのだけれど、その土地に根付いた信仰物ということではなくなるので、地元で管理しなが

ら少しでも劣化を防ぐにはどうしたらよいかという研究を始めたのだそうだ。

山内さんは 3 月に大学院を修了して、4 月からは栃木県にある美術館の学芸員として働くことになっている。それでも塩田の行屋の仏像群と関わってゆきたいとも話してくれた。地元の人間としてはありがたい話である。

先に述べてように、塩田の行屋についてはわからないことが多く残っている。置賜地方で一般的に「行屋」というと、米沢や飯豊町のお籠もりをする「行屋」のことであるが、塩田の行屋は参拝するお堂という性格を持っていたようである。ほかにもこのような形態の「行屋 (ぎょうや)」という施設があったのか、それもよくわからない。私たちとしてももう少しこの塩田の行屋について調べてみる必要があると考える。

■ お知らせなど

年度末になっています。この号が皆さんのお手元に届くころには新しい年度になっているかもしれないと思っています。

さて、新年度の史談会の活動は総会から始まります。あまり遅くならないようにしたいと思います。

新入会員の佐藤健一さんが編集し、会長の丸川二男さんが発行人となって『絵はがきで見る「大正・昭和の白鷹」』が刊行されました。1,500 円です。御希望の方は佐藤さん、丸川さんへ。

史談会の面倒を見てくださっていた教育委員会の芳賀和則さんが 4 月からスポーツ関係の担当に変わるそうです。残念ですが仕方ありません。大変お世話になりました。ありがとうございました。今後は個人として史談会へも関心を持ってくださることを期待します。

先のことでわかっている予定を記しておきます。

6 月 28 日 (日) 置賜民俗学会研修会 米沢市

7 月 12 日 (日) 山形県地域史研究会 長井市

このような日程を考えると、何とか 5 月中には総会ができないものかと思いますが、どうでしょうか。

総会の内容としては、講演と研修旅行の日程などの事業計画が主になります。

研修旅行は深山観音堂の関係や江口さんの話してくれた五十公野氏の関係で、会津から新潟新発田市方面はどうかという声もあります。どうぞ総会までお考えください。(守谷)